

江戸時代

1 福山城築城と城下町整備

(1) 江戸時代の福山城

福山城は、1619年（元和5年）に水野勝成が築いた城です。水野氏、松平氏、阿部氏と明治になるまで、福山藩の政治の中心となりました。

正式な名前を「鉄覆山朱雀院久松城」と言います。名前の由来は、天守閣の北面を鉄で覆っていたこと、城が備後の南にあり、南を守る神様とされていた朱雀に例えられたこと、松のように久しく栄える城という意味からきています。芦（葦）田川の南に城があるので「葦陽城」とも言われていました。

水野勝成が備後の領主になった時、当時の城であった神辺城から、城を移すことを決めました。その候補地として、**箕島**（現在の箕島町）、**亀寿山**（現在の新市町宮内）、**常興寺山**（現在の福山城）などがありましたが、海にも近く、陸路にも近いことから常興寺山が選ばれました。



〔福山城古写真〕



福山城は本丸、二の丸、三の丸と、
内堀と外堀の二重の堀からできてい
ます。本丸は、豊臣秀吉の大阪城天
守閣をお手本にしたと言われる五層
六階の天守閣が築されました。また、
その南側には秀吉が建てた京都にあ
る伏見城から移築された伏見御殿が
ありました。さらに、伏見櫓、筋鉄
御門、月見櫓、大手門なども京都か
ら移築されました。これらは徳川二
代将軍秀忠から築城の時に与えられたものです。



〔現在の福山城〕

このように、城の一部は移築されたものですが、この当時、最も進んだ建築技術や土木技術を使って建てられた城だと言われています。



〔伏見櫓〕



〔筋鉄御門〕

(2) 明治以降の福山城

明治時代になると福山藩がなくなり、1873年（明治6年）の「^{はいじょう}廃城令」という法律によって多くの建物がとり壊されました。さらに、1945年（昭和20年）戦争による^{くうしゅう}空襲によって天守閣と御湯殿が^{おゆどの}焼け落ちました。しかし、1966年（昭和41年）に天守閣と御湯殿、月見櫓が復元され、天守閣の中には博物館がつくられました。空襲によって焼け落ちることなく残った伏見櫓と筋鉄御門は国の重要文化財に指定され大切に保存されています。



〔天守閣の土台の石垣〕

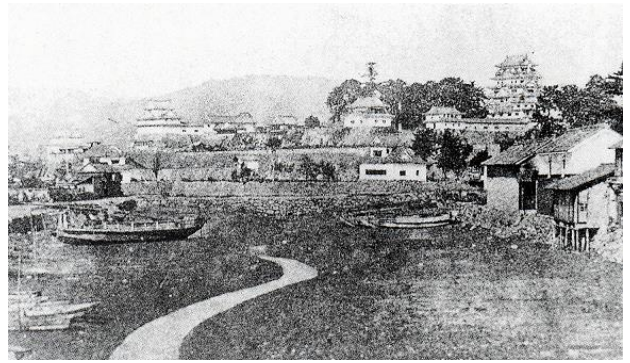


〔福山駅前で発掘された石垣〕

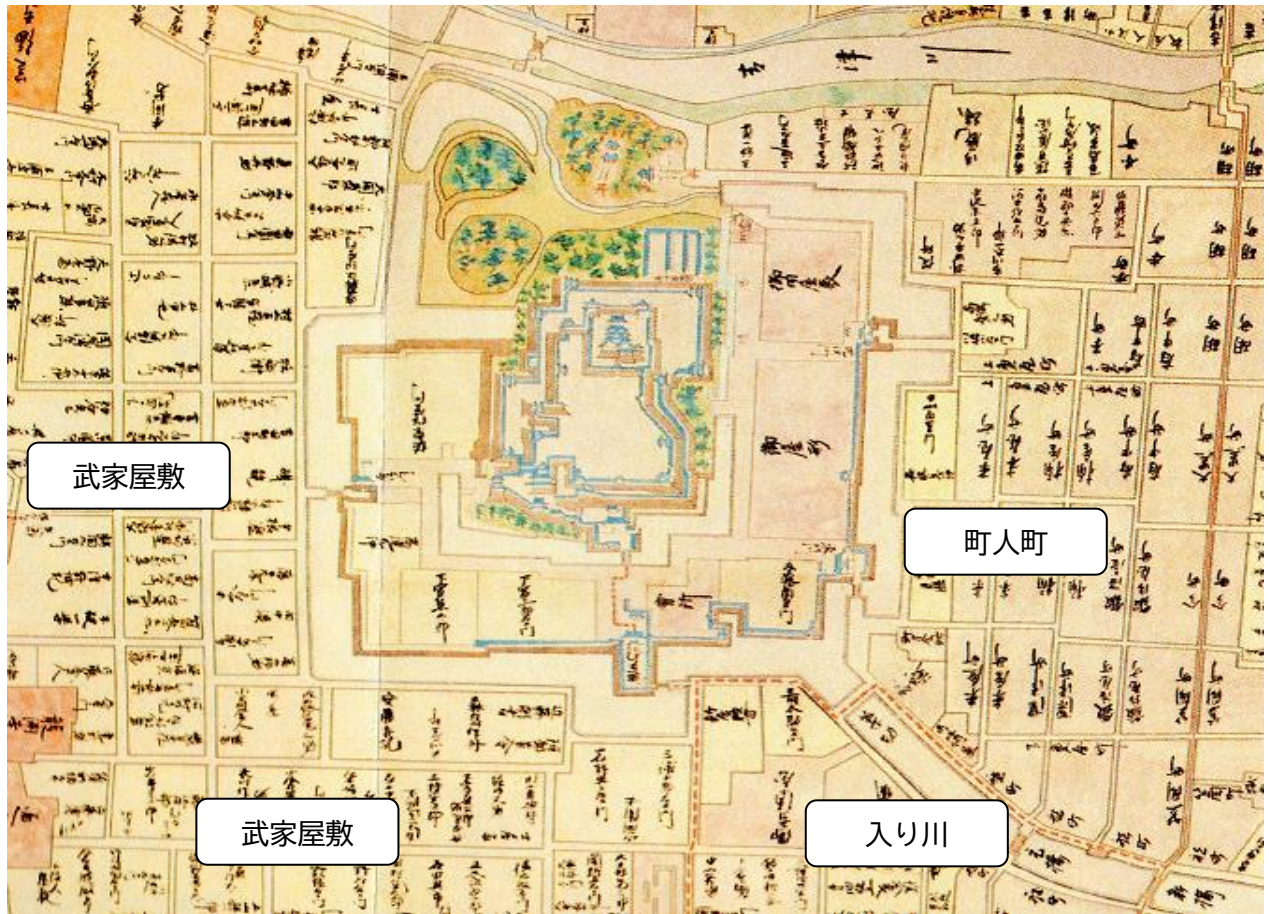
(3) 城下町の成立

福山城築城と並行して城下町の建設も進められました。城下町の南側と西側には藩士が住む侍屋敷が町全体の約3分の2を占め、東側から南東にかけて商人や職人が住む町人町となっていました。

町人町は、大名や武士が生活で必要とするものを作り、できた品物を運んだり、売ったりする役割を持っていました。そのため、城下町南東部の入り川近くの水運に適した場所に配置されました。



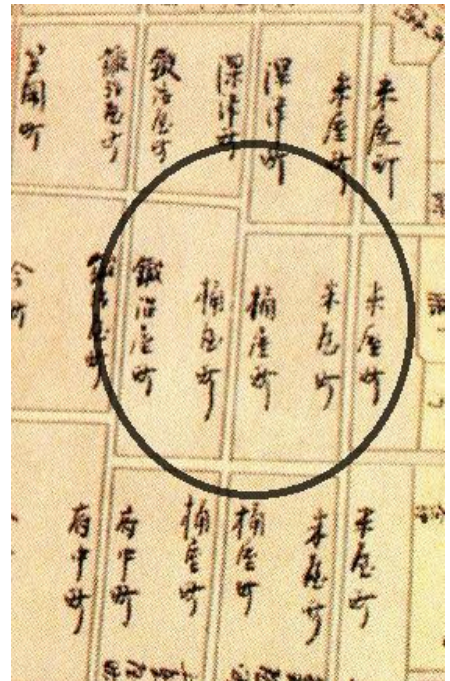
〔福山城南東方面から堀へ続く入り川〕



〔福山城下町図〕

また、これらの目的を効率よく行うために鍛冶屋や桶屋、大工などの職人や商人たちを仕事別にまとまって住ませました。町人町には土地にかかる税金やその他の税が免除され、商人や職人が仕事をしやすくしたため、遠くの国からも多くの人が集まりました。このときの様子を『福山語伝記』では「それぞれが自ら働いて沼地や芦原を埋め立てて家や町並みをつくっている。」と伝えています。

さらに、東側の一部を寺町として寺院を集中させたほか、城下町の外回りに寺社を配置しています。これは戦いが起こった時に、広いお寺の境内を城の周囲に巡らせた^{めぐ}囲いとして利用するための軍事的な理由からでした。こうして、建設当初は12町であった福山の城下町は、多くの人々の努力と開発によって発展し、水野時代にその数は30町にまで達しました。



〔職種を町名とした例〕

◎ 城下町の町名について

城下町の町名の由来は、大きく次の5つに分けられます。

- ① 移住者の出身地を町名としたもの
 - ・ 府中町(府中から) ・ 笠岡町(備中笠岡から)
- ② 職種を町名としたもの
 - ・ 桶屋町(桶屋職人の住居)
 - ・ 大工町(大工職人の住居)
- ③ 位置や成立期を町名にしたもの
 - ・ 本町(開発当初は目抜き通りでもっともにぎやかな町)
 - ・ 中町(神島町と大工町に挟まれた町)
- ④ 縁起を担いだもの
 - ・ 福富町(福にめぐまれ、富を望んだ町名)
 - ・ 大黒町(七福神の大黒様からとった町名)
- ⑤ 開発者の名前を町名にしたもの
 - ・ 奈良屋町(大和郡山〔現奈良県大和郡山市〕より移住した奈良屋の開発による)

「桶屋町」や「鍛冶屋町」という町名が読み取れるね。



これらの町名は1965年(昭和40年)の区画整理に伴い大きく変更され、江戸時代からの伝統的な町名はその多くが廃止^{はいし}されました。

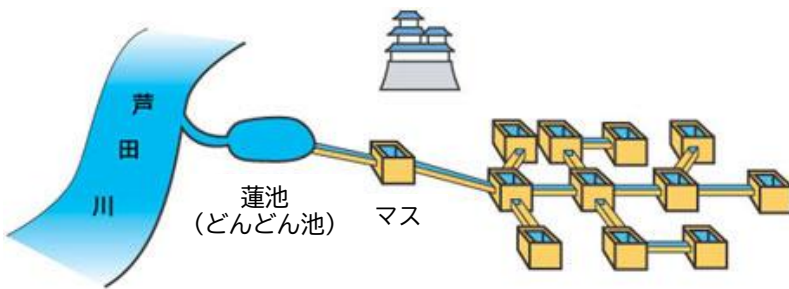
(4) 上水道(旧水道)の整備

福山城が建てられて間もない頃、当時は、城のすぐ近くまで海水が入り込んでいたため、人々が生活に使う井戸水に塩分が混ざっていました。そこで、水野勝成は、城下町に芦田川の水を利用した上水道を整備することにしました。これは、江戸の神田上水などに次ぐ全国で5番目の上水道でした。

1619年(元和5年)に、お城の北側に芦田川の本流を通す計画が立てられ、大規模な工事が始まりました。しかし、その翌年に備後地方は大雨による大洪水に襲われ、建設途中の城下は大きな被害を受けてしまいました。

そこで、計画を一部変更し、芦田川の本流は草戸方面に流し、用水路(現在の吉津川)を蓮池にひいて水に混じっているちりやほこりを池の底に落とし、それから地面に埋めた土管や木管を使って城下に水を流すことにしました。

福山城下の上水道づくりは、多くの困難にぶつかりながらも、決して負けず、人々が力を合わせて成し遂げた大事業であったと言えます。



〔江戸時代の水道の仕組み〕

左の写真は現在の蓮池だよ。池から水が流れ出す場所でドン・ドン・ドンと音を立てたことから「どんどん池」とも呼ばれているそうだよ。



〔木管を覆っていた暗渠〕



〔旧水道の木管〕



〔旧水道の木製のマス〕

(5) ^{かんたく}干拓事業について

江戸時代は農作物の生産を増やすために全国的に新田開発（新しい農地づくり）が盛んに行われています。福山藩^{はん}の新田開発は水野家の時代（1619年～1698年）に集中して行われています。

水野勝成は新田開発を進める上で、治水事業（用水路や堤防^{ていぼう}を造る仕事）に大きな力を注ぎました。芦田川^{はんらん}の氾濫を防ぐために頑丈な堤防^{がんじょう}を造ったり、海岸沿いにも堤防^{しんにゅう}を造ったりすることで、海水の浸入を防ぎながら農業ができる干拓地を増やしてきました。

下の地図は水野時代から明治の初めにかけて干拓により造られた地域を時代ごとに表したものです。芦田川の氾濫から城下町を守るという困難な治水事業に立ち向かい、広い農地を生み出すことによって、福山藩の農業生産力は大きく向上しました。その結果、福山藩が水野勝成へ引き渡された時の石高^{こくだか}が約10万石であったのに対し、5代勝岑^{かつみね}が亡くなった時の石高は13万2800石余りとなり、水野時代の79年間の開発が、いかに盛んであったのかが分かります。

また、新田開発によって増産されたのは米やその他の穀物ばかりではありません。松永塩田の開発による「塩」の生産や当時の人々がとても必要としていた「木綿」の生産、そして「備後表」の名で現在でも有名な畳表^{たたみおもて}の原料となる「い草」の生産も盛んに行われるようになりました。

積極的な新田開発の結果、「塩」「木綿」「い草」の3つは福山藩を代表する特産物として成長し、藩の政治や経済を支える上での大きな柱とすることができたのです。

ふるさと豆知識 福山の郷土料理「うずみ」

一見するとただの白いご飯。はしを入れてみると、ご飯の下からえびや松茸まつたけ、里芋さと芋などいろいろな季節のおいしい「具」がだし汁とともに現れてくる。これが福山の郷土料理「うずみ」です。

「うずみ」の由来は「埋める」という言葉が語源とされています。江戸時代、農村で暮らす庶民しよみんは、収穫しゆかうした米のほとんどを年貢ねんぐとして納めなければなりません。また、当時は、儉約政治けんやくが行われ、庶民が白米やおかずを食べることを贅沢ぜいたくとされていたため、人々の主食は、麦やひえ、里芋や大根などをご飯に混ぜたり、それに汁をかけたりしたものでした。しかし、収穫の日は特別でした。人々は、収穫できたことを神様に感謝し、来年の豊作を祈るため、知恵ちえをしぼり、白米を炊き、野菜や鶏肉とりにく、えびなど普段は食べられないようなおかずをご飯の下にうずめ、隠して食べることにしました。これが「うずみ」の始まりと言われています。

昭和40年代頃までは、主に収穫を祝う料理として、よく食べられていましたが、食習慣の変化により、次第に家庭や地域で食べられなくなっていきました。今も神辺町の秋祭りでは、「廉塾れんじゆく」の広場で、伝統的なうずみを食べることができます。

福山市では、「うずみ」を郷土の食文化として後世に伝える目的で、平成に入って小学校給食のメニューにも加えています。

また、福山の様々な食材を使って、誰もが食べてみたいと思う「福山ならではの新たなグルメ」を創出するために2010年（平成22年）に「福山食ブランド創出市民会議」を立ち上げました。福山市市制施行95周年には、福山市長より福山の伝統的な郷土料理である「福山うずみごはん」を積極的に発信していく宣言が行われ、「福山うずみごはん」が食べられるお店を記したマップや備後がすり餅の生地を活用した「バナー（布看板）」、市内のうずみ研究グループが製作したマンガ「福山うずみ物語」などでPRに努めるなど、市民の皆さんと一緒にうずみを盛り上げています。最近では、他県や世界に向けても発信できるものになるように、ソフトクリームの下にぶどうや桃などをうずめたり、くわいをうずめたりしたものなど、福山の様々な食材をうずめた「創作うずみ」も登場しています。ぜひ、みなさんも、福山の郷土料理である「うずみ」を味わってみてください。



ふるさと豆知識

まほろし 幻の焼き物 ～姫谷焼～
ひめたにやき

江戸の初期に深安郡広瀬村大字姫谷（現在の福山市か茂町百谷^{ももだに}）で、有田焼^{ありたやき}、九谷焼^{くたにやき}と並び日本の「初期三赤絵^{あかえ}」に数えられる姫谷焼の生産が陶工・市右衛門^{いちえもん}により行われていました。生産が行われた期間がおおよそ約20年と短いこと、現存する作品が100点余りとあまり多くないこともあり、長く「幻の焼き物」と呼ばれていました。しかし、姫谷焼の窯跡^{かまあと}の存在が明らかになり、1969年（昭和44年）から行われた発掘調査^{はっくつ}により、色絵のほかに染付^{ぞめつけ}・白磁^{はくじ}・青磁^{せいじ}・陶器^{とうき}なども製作していたことなどが分かりました。作風は薄手^{うすて}の白磁にすっきりと画題を描いており、清楚で純日本風なものが多く見られます。



このように福山では当時の最先端^{さいせんたん}の赤絵技術を用いた優れた作品が早くから作られていたのです。

（注）近年の発掘調査で九谷焼の色絵磁器片が有田町で多数見つかり、古九谷は有田産という説が有力となっている。

2 海運の拠点 鞆

(1) 鞆の歴史ある町並み

鞆は古くから、瀬戸内海の潮の満ち引きの関係で、東西の船が集まる「潮待ちの港」として栄え、交通の重要な拠点として発展しました。

江戸時代には、東北と大阪を結んだ北前船の寄港地として物流の拠点となり、鞆には、ばく大な財を築いた商人が数多く生まれました。そのため豪商の屋敷や蔵が立ち並ぶ豊かな町並みが作られました。



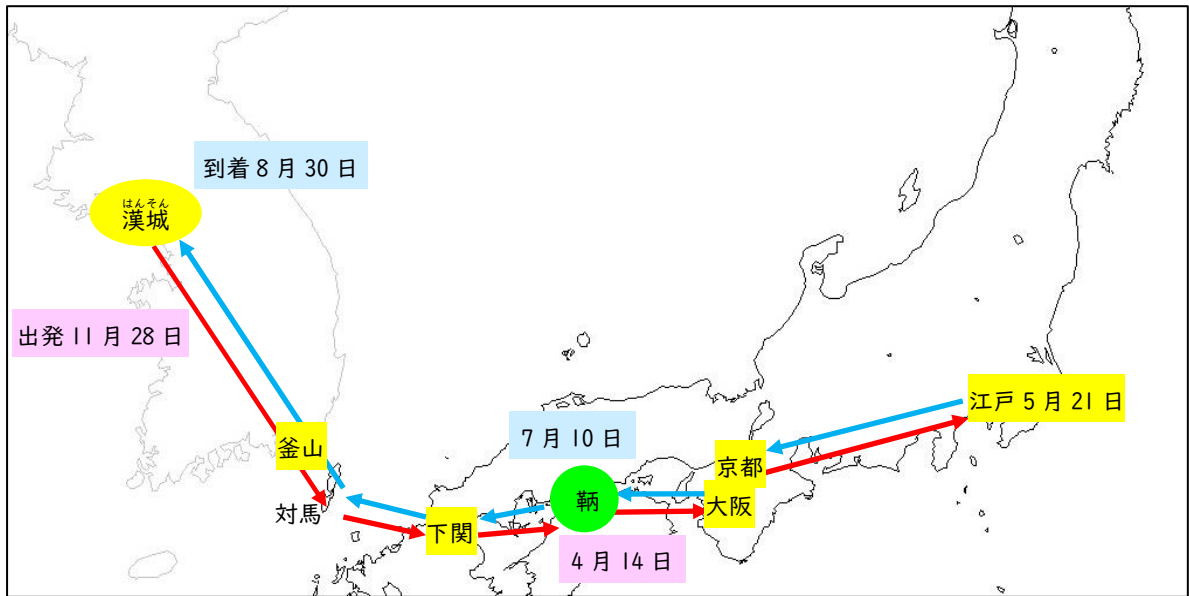
〔太田家住宅〕

近世になって、蒸気船などの動力を持った船などが登場すると、次第に鞆の浦で潮待ちをする必要性は薄れ、さらに明治に入って陸上交通が主流となると、鞆の拠点性は低下しました。現在では鞆港への商船の出入りはほとんどありません。しかし、このことにより多くの古寺や江戸時代の情緒^{じょうちよ}を持つ古い町並みが今に残る要因ともなり、観光地としての鞆の魅力を引き立てています。

(2) 国際都市 鞆

鞆が「海の駅」として果たした仕事のうち最大のものは朝鮮通信使の接待でした。豊臣秀吉が行った朝鮮出兵以降、友好関係にあった朝鮮と日本との関係は途絶えていました。

しかし、江戸幕府は長崎の対馬藩^{つしま}を仲立ちとして朝鮮との国交回復に努め、1607年（慶長12年）に第1回の朝鮮通信使の訪問が実現しました。その後、幕府は鎖国政策^{さこく}をとり、海外との行き来を禁じましたが、朝鮮通信使は12回も日本を訪れています。



〔1748年の朝鮮通信使の道のり（全276日）〕

幕府は将軍の代替わりごとに来日した通信使一行を国賓として迎えたため、鞆の浦で11回の通信使を迎えた福山藩にとって、その接待は大変重要でした。

通信使一行には、役人だけでなく優れた学者や書家、画家、音楽家などの文化人も含まれていたため、日本の学者は外国の文化に触れようと通信使の宿舎を訪ね、筆談（共通の文字である漢字を書いて会話する）で、漢詩を交換し合ったり、質問し合ったりしました。

福禅寺對潮楼には、今でも通信使の書が多く残っています。1711年（正徳元年）の第8回通信使の従事官李邦彦は、宿泊した對潮楼から見た鞆の景色を「日東第一形勝」（朝鮮より東の世界で

一番景色の美しい場所の意味）と賞賛しました。また、朝鮮通信使だけではなく、琉球使節やオランダ商館長なども、江戸への行き帰りに鞆の浦を訪れ、海外文化の交流が行われました。瀬戸内の重要な港町であった鞆の浦は、まさに海外から多くの人々や文化を迎え入れた「国際都市」だったと言えます。



〔朝鮮通信使と談笑する福山藩士〕



〔福禅寺對潮楼から見た瀬戸内の風景〕

(3) 鞆での受け入れ

朝鮮通信使は、その度ごとに人数が変わりますが、500人前後の大使節団でした。それに水先案内をつとめた対馬藩の役人が約500人で、合計1000人以上の人々が海や陸の大移動したのです。

鞆の浦では、福山藩の役人や食事・宿泊の世話をする人たちが、さらに約1000人以上もの人々が狭い鞆の町にあふれました。宿はお寺や大きな商家があてられ、一般の人々と通信使との様々な文化交流が行われました。

右の表は『福山藩覚書』に記されている1711年（正徳元年）の朝鮮使節一日分必要物品です。これら通信使の接待にかかる経費はすべて福山藩の負担となり、その分、福山の人々の税や仕事は増えたと考えられています。

品物	数量	品物	数量	品物	数量	品物	数量
白米	833 升	鶏	30 羽	里芋	76.5 升	釣柿	
酒	275 升	生鮑	22 コ	ねぎ	71 把	炭	
みそ	174 升	鮮大鯛	61 枚	せり	30 把	薪	
しょう油	65.75 升	するめ	912 枚	かぶら	207 本	豚	
酢	42.1 升	鰹節	122 本	人参	207 把	いのしし	
塩	70.8 升	卵	2168 コ	九年母	116 コ	以上は正史から下官までの朝鮮使節団の一日分で、船頭分は別になっている。また、銀933匁が通詞小者・僧侶などへの手当として計上されている。	
ごま油	37.6 升	こしょう	409 匁	ゆず	116 コ		
ろうそく	(50目)24挺 (40目)104挺	小麦粉	12.2 升	しょうが	11.5 升		
お茶	22 貫	小豆	26 升	干鯛	106 枚		
たばこ	7貫150目	辛子	6.3 升	干菓子	16 袋		
雉子	31 羽	ごぼう	10313 本	栗	51 コ		
				みかん	3177 コ		

〔1711年（正徳元年）朝鮮使節一日分必要物品〕
『福山藩覚書』

ふるさと豆知識

シーボルトの上陸

鞆の記録『中村家日記』には、オランダ使節の船が1826年（文政9年）に江戸からの帰り道、鞆の浦に寄港し、宿泊したことが記されています。その記録の中には「…外科オランダ人は山々を見物して草木・鉱石を拾い集め、ついでに町内の見物をした」という記述が見られます。実はこの「外科オランダ人」とは長崎に鳴滝塾を開き、高野長英など多くの塾生に西洋の医学や博物学を教えたシーボルトだったのです。



〔シーボルト〕

鞆皿山窯跡

鞆町皿山には、皿山窯跡があります。これは、保命酒用の徳利や燈明皿、すり鉢などを焼いていた12連式の登窯です。この窯は、1865年（慶応元年）に、保命酒醸造元の中村吉兵衛が作り、1938年（昭和13年）まで使われていました。ここの焼き物は、遠く新潟県でも見つかり、北前船に積まれて広く全国に伝わっていたことが分かります。



しかし、明治以降、保命酒保存には、ガラス瓶などが使われるようになったため、窯は使われなくなり、やがて途絶えました。

地域の人々は、地元に残されたこのような歴史遺産をぜひ復元し、保存していきたいと願っています。

3 神辺本陣と近世山陽道

江戸時代には、各地で江戸に通じる街道の整備が進みました。備後地方でも都と九州を結んでいた古代山陽道を南寄りの道に変えた西国街道（近世山陽道）が整備されました。神辺と今津は西国街道における宿場町として栄えました。

(1) 神辺本陣

本陣とは、江戸時代に参勤交代の制度による大名行列の一行が泊まるための施設です。

神辺には、山陽道では珍しく本陣が西本陣・東本陣と二つもありました。現在は、尾道屋菅波家が営んでいた西本陣がほぼ当時のまま残され「神辺本陣跡」として広島県史跡、建物7軒は広島県重要文化財に指定されています。



〔神辺本陣〕

筑前（現福岡県）黒田家当主の記録には、1854年（嘉永7年）4月26日に黒田家の者1500人が、分宿を含めて泊まったと記されています。

黒田家以外は、ここより350m東にある七日市の本荘屋（東本陣）が主に務めたとされています。西本陣には、大名や公家、幕府役人が宿泊した時に門前にかかげた関札（木札）が数多く伝わっています。

神辺には、三日市や七日市などの町名が残っているよ。町の名前と様子には、何か関係があるのかな。



(2) 神辺本陣の建物の様子

神辺本陣は、主屋（平屋建て・本瓦葺き）、店、住居などの建物と、門や敷地を囲む塀からなっています。

1748年（延享5年）に建てられた主屋は、御成の間、二の間、三の間、札の間、玄関、敷台があり、当時の面影をよくとどめています。



〔玄関と敷台〕



〔御成の間(奥)と二の間(手前)〕



〔大名の名を記した関札〕

本陣は約1000坪あり、大名が宿泊する時は27部屋、畳数200余枚が使用され、70人ほどが宿泊したと言われています。1回の参勤交代で約600人が宿泊するので、本陣以外に、近くの寺や町家などにも分宿していたようです。

緊急避難所は、本陣北側の万念寺ばんねんじが指定されていました。



本陣前の街道は、直角に曲がった角が続いていたよ。何のためにそんな道路をつくったんだろう。



ふるさと豆知識 今津本陣跡

備後地方には、1602年(慶長7年)に西国街道が整備された際に、今津にも本陣が設けられました。幕末には、戸数300戸以上、商家軒を連ねて町をなし、駒馬5頭を備えて、本陣を中心にして、にぎわったと言われています。現在も表門、堀、石垣などが、当時の面影を残しています。

4 寺子屋しじゆく、私塾はんこう、藩校

福山藩では、当時は村役人以外の農民はほとんど読み・書きができませんでした。そんな中で寺子屋が作られ、19世紀に入って急速に増加していきました。

(1) 寺子屋

農民や町人に読み・書き・そろばんを教えるところであり、多くは寺で行われていました。福山藩内では49の寺子屋が確認されています。



〔寺子屋の様子〕

(2) 私塾

江戸時代、学問の修行の場として、多くの学者が「私塾」を開きました。神辺では、菅茶山かんちやざんが「黄葉夕陽村舎こうようせきやうそんしゃ」（後の藩校廉塾れんじゆく）を開き、神辺・福山はもとより、四国・九州・奥羽など全国からやってくる子どもたちを指導しました。

福山藩内にはその他に、福山西町の就正堂しゅうせいどう、今津村の大成館たいせいかんがあり、主に漢学と詩文を教育していました。



〔黄葉夕陽村舎（廉塾）〕

(3) 藩校

江戸時代、各藩は武士の教育のため藩校を設立しました。福山藩では、1786年（天明6年）、藩主阿部正倫あべまさとむが弘道館こうどうかんを設立しました。弘道館では毎日儒学者が漢学を中心に指導し、剣術などの武芸は、他の道場に通って学んでいました。ここでは、武士だけが学ぶことを許されていました。

鎖国政策をとっている中アメリカのペリーが来航するなど、日本中が混乱むかを迎えた幕末、阿部正弘は、新しい考えをもった有能な人を育てていく必要性を感じ、1855年（安政2年）「弘道館」を「誠之館せいしかん」と改め、身分に関係なく弓、槍やり、剣術などの武芸や国学、洋学、医学などの文芸を学ばせる新しい藩校を設立しました。



〔誠之館記念館〕

ふるさと豆知識

誠之館記念館

現在広島県立福山誠之館高等学校にある誠之館記念館は、現在の「学びの館ローズコム」の辺りにあった藩校「誠之館」の玄関の建物です。藩校が閉校になったあとも師範学校や広島県立福山中学校の玄関として使用されました。昭和になり、県立福山誠之館中学校が三吉町に建てられた際、誠之館記念館として増築され、誠之館高等学校の木之庄校舎の建設に併せて現在の地に移転されました。

5 飢饉、自然災害と一揆

江戸時代の中頃から、大規模な百姓一揆が全国に発生し始めました。

福山藩も例外ではなく、水野氏・松平氏の時代には発生しなかった百姓一揆が、阿部氏の時代になると見られるようになりました。

1782年(天明2年)、東北地方を中心に起こった冷害や浅間山の大噴火によって全国で大飢饉が発生しました。

福山でも、1782年(天明2年)から1788年(天明8年)にかけての長雨・洪水・冷害などによる凶作や、虫害による稲・木綿の大凶作などにより、「天明の大飢饉」が起こり、米価が高騰しました。

藩は、凶作にも関わらず、従来と同じ量の年貢納入を迫り、厳しい取り立てを続けたため、百姓たちの生活状況は限界に至り、餓死する人も多く、草の根や木の皮、壁の土まで食べ尽くしていました。

そんな中、1786年(天明6年)12月6日未明に、品治郡服部(今の駅家町)蛇円山の山頂から火の手が上がり、それを合図に追いつめられた備後五郡の5万人を超える百姓たちが蜂起しました。百姓たちは今の神辺町徳田の庄屋宅で藩の役人へ30カ条の要求を出して交渉しましたが、一揆の要求は拒否されました。

1787年(天明7年)の正月に再び藩領全域にわたって、百姓たちは蜂起しました。領内を流れる芦田川一帯で篝火をたき、隣の岡山藩側に越境して一揆が発生していることを宣伝しました。藩主はこの事態を重く見て、百姓の要求を受け入れ、未納の年貢や高利の借金の帳消しなどを認めました。

この一揆は、1人の犠牲者も出さなかったうえに、百姓の要求が通るといふ、百姓側の勝利で終結しました。そのため、全国的にも珍しい一揆として知られています。

ふるさと豆知識

福山藩で起こった一揆

1717年(享保2年)	品治・芦田郡で発生する
1753年(宝暦3年)	深津・安那・品治・芦田・沼隈郡で発生する
1770年(明和7年)	安那郡で発生する
1786・7年(天明6・7年)	品治・芦田郡で発生し、藩内へ広がる
1831年(天保2年)	事前に藩に知られてしまい、未遂で終わる

6 幕末の福山

(1) 鞆七卿落遺跡

この遺跡は、1863年(文久3年)8月18日の政変で都を落ちて長州へ下る途中、三条実美ら7人の公卿らが、鞆の津(今の鞆港)の保命酒醸造元で廻船問屋も営んでいた中村家に宿泊し、翌1864年(元治元年)にここで争議を重ねたと言われています。現在は、所有者、太田氏の名をとって、「太田家住宅」「太田家住宅朝宗亭」と命名され、国の重要文化財になっています。三条実美ら7人の公卿たちはここで傷ついた心と体を休めたそうです。



〔鞆七卿落遺跡(太田家住宅)〕

世にならす 鞆の港の竹の葉を

かくてなむるも めづらしの世や (実美)

(訳) 有名な、鞆の港の保命酒を、
本来京にくらす我々が地方に下って飲んでいるとは、世の中も変わったものだな。

実美が鞆で詠んだ歌だよ。



公卿は、公家の中でも、太政大臣・左大臣・右大臣・大納言・中納言・参議らの位の高い官職の人たちのことです。

彼らは、この後、明治新政府で重要な役割を果たすことになります。



ふるさと豆知識

「鞆七卿落遺跡」は、「旧保命酒屋」

主屋の奥に入ると、白壁の酒蔵がありそこに酒類醸造に使われていた、大きなかめや炊事場(カマドや羽釜)、酒をしぼる酒槽とハネ棒、つるされた大石などを見ることができます。大勢の職人が酒造りをしていた様子が分かります。

また、建物の天井の梁の太さに驚かされます。今から約270年前に建てられたとは思えないような重厚なつくりになっています。



(2) いろは丸事件

坂本龍馬^{りょうま}と海援隊士^{かいえんたいし}らに乗せた「いろは丸」は、1867年(慶応3年)4月19日長崎を出港し、瀬戸内海を東に大阪へと向かっていました。

いろは丸は、海援隊^{いよおおず}が伊予大洲藩から1航海500両で借り、この時が海援隊の初航海でした。しかし、4月23日深夜、鞆の沖^{きしゅう}で紀州藩の「明光丸」^{めいこうまる}と衝突しました。

この事件^{めく}を巡り坂本龍馬は、紀州藩「明光丸」の船長・高柳楠之助^{たかなぎすのすけ}と賠償交渉を行いました。その場所となったのが、町役人魚屋萬蔵宅^{うおやまんぞう}で「いろは丸事件談判跡」として石碑が立っています。今は、宿屋になっています。また、いろは丸乗組員たちの宿となった、江戸時代の廻船問屋・枳屋清右衛門宅^{かきやせうゑもん}も現在残っています。

交渉は場所を長崎に移し行われましたが、龍馬は「万国公法」^{のつと}に則り、徳川御三家の一つであった紀州藩と対等に渡り合い、多額の賠償金を得ることに成功しました。



〔魚屋萬蔵宅跡〕



〔枳屋清右衛門宅跡〕

ふるさと豆知識

鞆と坂本龍馬

鞆での坂本龍馬と紀州藩側との賠償交渉の経過は、『備後鞆津応接筆記』に残っています。この文書は、「備後鞆津ニ於^{さいたにうめたろう}テ才谷梅太郎紀州高柳楠之助等ト應接筆記」と書かれており、交渉にあたる時、暗殺者に対する用心のために坂本龍馬は、「才谷梅太郎」と名乗っていたようです。



〔いろは丸記念館〕

鞆の「いろは丸記念館」^{ちんぼつ}には、沈没船の調査の結果発見された鉄片^{てつぺん}等が展示されているよ。



ふるさと豆知識

喜多流 大島能楽堂

－ 福山から発信する伝統文化「能楽」－



これは、光南町にある西日本では唯一の、個人が建てた本格的な能楽堂だよ。日本が世界に誇る能楽をこんな間近で楽しめるなんてすごいね。



〔喜多流 大島能楽堂 能舞台〕

「能楽」は、室町時代に生まれ、今では日本が世界に誇る舞台芸能の一つです。桃山時代には、豊臣秀吉も能を好み、戦陣にも組み立て式の能舞台を持ち込むほどでした。その能舞台は、福山城が建てられたところ水野勝成が譲り受け、城内で組み立てられ、能が演じられたと伝えられています。現在は、鞆の沼名前神社境内に移され、国の重要文化財に指定されています。

喜多流は、江戸時代初期に、将軍徳川秀忠の後押しを受け生まれた流派です。水野勝成の時代には武家に、阿部正弘の時代には武家に加え町人にも流行し、盛んに演じられました。

大島家は全国で20家ある喜多流宗家直系の「職分」（プロの能楽師、宗家以外では最高の職位）として、明治以降、備後一円に能楽を普及させました。

1914年（大正3年）、2代目大島寿太郎が、霞町に大島能楽堂を建てました。1945年（昭和20年）の空襲で一度は焼失してしまいましたが、1948年（昭和23年）3代目大島久見が舞台を光南町に再建し、1971年（昭和46年）の舞台の建て替えや1997年（平成9年）の座席の改修を経て現在に至っています。

1958年（昭和33年）から定例鑑賞能を開催し、各地からの能楽ファンの期待に応えています。

「大島能楽堂」では、衣装を着ての能楽体験をすることができるんだよ。申し込みば、学校に出張授業にも来てくれるよ。



〔川口東小学校6年生のみなさん〕



〔南小学校6年生のみなさん〕

